

報告番号 甲 乙 第 号

村上 暁子君 博士学位請求論文 審査報告

論文題目：レヴィナスにおける **humanisme** 刷新の企て

論文審査担当者

| | | |
|----|----------------------------|-------|
| 主査 | 慶應義塾大学文学部教授 同大学院文学研究科委員 | 谷 寿美 |
| 副査 | 慶應義塾大学文学部教授 同大学院文学研究科委員 | 山内 志朗 |
| 副査 | 慶應義塾大学文学部教授 同大学院文学研究科委員 | 奈良 雅俊 |
| 副査 | 明治大学大学院文学研究科教授 | 合田 正人 |

本論文は、ユダヤ人思想家エマニュエル・レヴィナスが、20世紀の反ヒューマニズム的傾向とそこからの批判に耐え、なお且つ従来のヒューマニズムの問題点をも克服するような「他なる人間の人間主義」(**humanisme de l'autre homme**)を主張していったその発想の独自性と意義を、宗教性と倫理性の契機を含む「人間なるもの」(**l'humain**)の概念等の解釈を通して、特に倫理的観点から解読しようとするものである。

全体の章立てと構成は以下の通りである。

第I部 他なる人間の人間主義

第一章 「唯一的なもの」の意味論

第1節 現代における「人間主義」の課題

- (1) 反ヒューマニズムの教訓
- (2) ヒューマニズムと反ヒューマニズムを超えて

第2節 「存在論」から「倫理」へ

- (1) 存在することの内在性
- (2) 存在とは他なるものとの関係

第3節 「意味」の回復

- (1) 言語の危機とヒューマニズムの危機
- (2) 人間の唯一性
- (3) 「顔」と「痕跡」
- (4) 方位としての「意味」

第4節 「人間主義」の特異性

第二章 「創られてあること」の時間性論

第1節 人間性／主体性概念の解体

- (1) 「起源／原理」としての存在理解
- (2) 「享受」を起点とした主体化
- (3) 「起源」を我有化する意識

第2節 関係概念としての主体性

- (1) 同一性なき人間
- (2) 「同のうちなる他」としての一者
- (3) 「召喚」における受動性

第3節 「隔時性」としての時間

- (1) 「無起源」における他者の触発
- (2) 自由に先立つ責任
- (3) 「人間なるもの」の筋立て

第4節 人間の新たな語り方

第Ⅱ部 無限者へと開かれた主体性

第一章 「身代わり」概念による主体性の復権

第1節 「実存」の構造

- (1) キルケゴール読解の意味
- (2) 「実存と倫理」

第2節 「遜り」の様相

- (1) 「身分秘匿」
- (2) 「顔」に遜る神
- (3) 「身代わり」

第3節 「身代わり」の主体性論

- (1) 主体の復権
- (2) 超越の方位

第二章 神のかたどりとしての「人間なるもの」

第1節 創造主のかたち — 責任における自由

- (1) リトアニアにおけるタルムード研究の精神
- (2) 「生ける魂」としての人間
- (3) 開かれた内部性としての「心性」

第2節 絶対者のかたち — 有限のうちなる無限

- (1) 無限者と創造主の同一性の問題
- (2) 「祈り」と「学習」における絶対者とのかかわり
- (3) 思惟と言語における無限性

第三章 飢え、苦しみ、祈る「魂」の身体性

第1節 心身の結びつきの問題

第2節 弁神論批判としての「祈り」解釈

- (1) 無意味な「悪／苦痛」
- (2) 「祈り」による「善」への超越

第3節 実体性を超えて

- (1) 〈他人〉の「飢え」による覚醒
- (2) 「痛み」における情動性
- (3) 「人間なるもの」に宿る無限者の観念

結語

論文概要

序では、論文の問題意識と議論の方針、各章で提起する問いや仮説が示される。レヴィナスの「人間主義」思想に対し、従来のヒューマニズムを再興するものではないか、自身のユダヤ教信仰に基づく一種の教化的言説ではないか、といった批判が向けられることを踏まえ、第Ⅰ部と第Ⅱ部で異なるアプローチを採用して「人間なるもの」をめぐる考察を倫理的・宗教的側面から解読することで、これらの批判を退ける方針が示される。

第Ⅰ部は、初期からの議論を踏まえつつ、過渡期の論文集として脇に置かれがちな『他なる人間の人間主義』(1972年)の取り組みに光を当て、レヴィナスにおける「人間主義」の課題と方法論を検証している。なかでも、『全体性と無限』(1961年)以降に強制的な形で示される意味論と時間性論を、彼の議論の枠組みをなすものとして解明することに重点が置かれている。

第Ⅰ部第一章では、レヴィナスが提案する独自の意味論に着目して、「人間主義」の特異性を明らかにする試みがなされる。レヴィナスは、1960年代後半のフランス思想界における反ヒューマニズム的思想の隆盛を前に、人間の内面性を軽視し主体を外的要因へと還元する「存在論」および「構造主義」を乗り越え、「人間主義」の可能性を示すという課題を自らに課している。この課題に即して、人間の固有性を主体の内側に見出しつつも、従来のヒューマニズムのように内面性を実体化することなく、その唯一的相貌に迫るために考案される「唯一的なもの」の意味論が分析される。この考察により、筆者は、「意味」を〈他人〉へと赴く「方位」(sens)として成立させる枠組みとしての「倫理」を提案するレヴィナス流の「人間主義」が、人間に内在する価値を「人格」に基づいて語る従来のヒューマニズムとは一線を画す発想であることを指摘している。

第Ⅰ部第二章では、特異な時間性概念を用いて従来の主体性概念を解体し、それを関係概念として新たに規定するレヴィナスの取り組みを分析することで、ヒトという類の生物学的本性や人間の本質に依拠する「自然本性主義」的なヒューマニズムの定石を覆す人間の語り方を明らかにしようとしている。レヴィナスは、自らの「起源」を掌握する自己同一的な〈自我〉としての主体性を解体し、自らの「起源」として掌握することの出来ない〈他者〉へと応答する可能性(「責任」(responsabilité))のうちでその都度生起する一者、唯一者としての〈自己〉を描き出している。筆者は、この主体性論を支えている「創られてあること」の時間性論を解明することで、主体の生の「内部性」(intérieurité)を、閉じられた一箇の実体としてではなく、〈他者〉へと開かれた動態として描き出すレヴィナスの発想の独自性に注意を喚起している。

第Ⅱ部では、ユダヤ教信仰に基づく思索の成果として哲学研究においては考慮の枠外に置かれがちな宗教的論稿群に光を当てることで、レヴィナスが用いるさまざまな宗教的概念が表現する「無限者に開かれた主体性」の内実を解明する作業を行っている。そこでは特に、一神教の宗教的伝統とレヴィナスの「人間主義」思想のあいだの関係を解明することに重点が置かれている。

第Ⅱ部第一章では、『全体性と無限』(1961年)から『存在するとは別の仕方』(1974年)のあいだの時期に「身代わり」(substitution)概念が導入されるにあたってキルケゴールの影響があった可能性に着目して、キリスト教思想との関係について考察している。筆者は、

この発想が導入される経緯を精査し、レヴィナスが、孤独な「実存」としての主体性理解を批判しつつも、神の「遜り」をめぐるキルケゴールの議論から着想を得て、関係のうちから超越する無限者と主体性のあいだの結びつきを「身代わり」概念を用いて規定する狙いを明らかにしている。この考察を通じて、無限者とのかかわりのもとで万人のために代わりになる「身代わり」の概念が、キリスト教的発想を無批判に取り入れたものではなく、キルケゴールとは別の仕方では主体性を復権するために考案された独自の発想であることが指摘されている。

第Ⅱ部第二章では、レヴィナスにおける「人間なるもの」の観念がリトアニア出身のラビ・ハイム「神のかたどり」という発想と連関している可能性について論じることで、ユダヤ教思想との関係について考察している。筆者は、ラビ・ハイムとレヴィナスを結びつけたユダヤ教のタルムードの伝統に目を向けたうえで、このラビのカバラ的発想が、人間の自由と責任、思惟と言語の可能性をめぐる『存在するとは別の仕方』(1974年)や『観念に到来する神について』(1982年)に通底する議論のうちで生かされていることを指摘している。例えば、自由と強制の二項対立を相対化する「責任における自由」という見地が、創造主に息を吹き込まれることで人間が万物を支える「生ける魂」となる構造に依拠すること、或いは、主題化することも対話することもできない絶対者が「意味」を通達する枠組みに、無限者の始原的収縮「ツィムツーム」という概念が用いられていること、などが追究されている。筆者は、これらの論点においてレヴィナスが、ユダヤ教の宗教的実践の枠を超えて人間的な営為そのものを問題化していることに注意を喚起し、無限者へと開かれた「魂」の諸相を描き出すことで「人間なるもの」と「神」という語をともに捉え直そうとする彼の「人間主義」思想の特徴を浮き彫りにしようとしている。

第Ⅱ部第三章では、これまでの考察によって得られた無限者とのかかわりにおける「人間なるもの」の主体性が、飢え、苦しみ、祈る人間の具体的な生のうちでいかなる内実をもつのが検討される。そこで筆者は、〈他人〉が被る悪の意味を問いかける「祈り」という倫理学的主題を導きの糸とすることで、〈他人〉を助けるような倫理的行為の根底に、〈他者〉によって触発され〈他者〉のために苦しむ「情動性」(affectivité)の形式を見出すレヴィナスの考察に光を当てる。「魂」の身体性とも呼ぶこの位相を解明することで、レヴィナス流の「人間主義」が、心身を区別して精神のうちに人間の固有性を見出す議論とは異なり、内部と外部、能動と受動の二項対立を超えた心身の結びつき、さらにはそれに基づく自他の結びつきのうちに「人間なるもの」を見出す発想であることが示されている。

結語では、各章における議論の成果が簡潔にまとめられ、論文全体の結論が示される。第Ⅰ部と第Ⅱ部の考察から、筆者は、レヴィナスにおける「他なる人間の人間主義」という発想が、自我論や主体性論、意味論、時間性論の枠組みを一新するとともに、伝統的な神学からは距離を取りつつ宗教思想を活用することで、反ヒューマニズム的発想に対抗して humanisme を刷新するものであると結論付けている。そして、万人を唯一者として尊重する唯一無二の「責任」への選を起点に、従来のヒューマニズムの枠組みを転倒させ、一神教の伝統に属する諸概念を全く別の角度から解釈しなおす彼の「人間主義」が、従来のヒューマニズムを再興するものでも、ユダヤ教的な教化的言説でもなく、独自の発想に由来するものであることを確認している。

審査概要

この度村上暁子君によって提出された学位請求論文は、エマニュエル・レヴィナスの **humanisme** に対する見解の独自性と意義を、そこに含まれる倫理的側面に光を当てつつ解説しようとして構成された意欲的な論稿である。レヴィナスによって用いられる諸概念はその語で理解される一般的な意味合いとは異なり時に特異ともいえるほどの内容を蔵している場合が少なくないが、**humanisme** に関しても従来のヒューマニズム理解とは一線を画した内容で語り出されている。筆者が着目したのは、レヴィナスがこれまでの伝統的自我論や主体論を経ての存在論的自然本性主義的なヒューマニズム、即ち、理性的且つ人格的存在者として特権を有するかのように錯覚されてきた人間中心のその視座を一方で批判しつつ、とはいえ時を同じくして噴出してきた 20 世紀の反ヒューマニズム的批判に同化することもなく、むしろその対立の構図を超えて尚新たに開かれ得る「人間的なありかた」の位相を指し示そうとしている点であった。そうしたレヴィナスの **humanisme** の意味の重畳の使用についてこれまで十分な論議が尽くされてきたとは言いがたく、その故にその概念内容も曖昧なままで残されているとすれば、村上君は、レヴィナスによって目指される新たな位相の **humanisme** の方を「人間主義」として訳し分け、特に「他なる人間の人間主義」(**humanisme de l'autre homme**) とレヴィナスが呼ぶところの諸相を、多様なテキストの精緻な読解を通してその発想の意義と重要性を解明しようとした。但し、そのように「人間主義」として先行的に訳し分けて論を進めていく手法は、あるいは後述するような方法論自体に対する疑義を生じさせる場合もあり、それは筆者自身の見立てに基づいて不可欠とされたものにすぎないとはいえる。しかしレヴィナスによって企てられた **humanisme** 刷新の意義の明確化のために敢えて決断して論を進めようとした村上君が志した事柄は、二部構成の特に後半部において説得力のある論述となって展開されている。

第 I 部ではレヴィナスの 60 年代の問題意識が表出した論稿集『他なる人間の人間主義』(1972 年)を手はじめとしてその思想的枠組みが読み解かれていくが、二度の大戦を経てのちの「ヒューマニズムの危機」を同時代人がいかに論じたか、デリダについては言うに及ばず、デュフレンヌやラクロワ、あるいはムーニエらペルソナリズムのヒューマニズムに対するアプローチにも目を配りつつ、それらとの対比においてレヴィナスの観点の独自性が説かれていくプロセスは、全方向に十二分とはいえないとしても、本論の目指すところに対してはかなう限り周囲の思想状況を踏まえての論及がなされている。「自然本性主義」的に人間の主体が特権を有する実体として存在論的に措定されることで、結果的には人間がモノ化されてきた従来のヒューマニズムに対する同時代の思潮の不信と批判は正当とみなしつつも、また内面性の軽視の下に人間を外部的な質料性に還元する反ヒューマニズム的傾向にも同調することなく、それらを超えるような方向で人間の尊厳を回復させるありかたを指し示そうとしたその「他なる人間の人間主義」が、独自の意味論や時間性論の解釈を通して明らかにされていく。レヴィナスは、自他の同質性に基づいて人類共通に内在する「人格」に「意味」(**sens**)を見出すのではなく、「意味」を他なるものへと赴く「方位」(**sens**)として捉え直し、「絶対的分離」を告げる仕方で現象する〈他者〉(**Autre**)あるいは無限者との関係性が結ばれることで、「私」がただ存在する匿名的な様態から脱して「人間なるもの」(**l'humain**)と化していくことを語っている。彼のそうした視点が依拠するのは

〈他人〉(Autrui)を尊重してこその特異な倫理的見地であることが、筆者によって第I部全体で諄々と解き明かされたあと、更に展開されるのはより独創的なレヴィナス解読である。

第II部第一章では、「受肉」等の聖書に由来する宗教的概念を多用するレヴィナス思想の中でも鍵概念となる「身代わり」(substitution)や「遜り」(humilité)がキルケゴールの主体性理解との比較対照で読み解かれ、第二章ではユダヤ教思想との関係性がリトアニアのラビ・ハイームの「神のかたどり」という発想との対照によって検討されているが、これらの考察はこれまであまり顧みられることのなかった方面の精査として稀少で優れた論述となっている。レヴィナス研究はとかくその哲学的思想面と宗教的側面が二分され、後者についてはユダヤ教伝統下の特殊な神学的見解とみなされるようなこともあるが、村上君がこの論で採用した倫理的見地から見ていくアプローチは、この後半部で実質的な成功をみたといってよい。精神/身体の二分法を問い直し、精神の能動的主体性に人間の本质を見出す従来の「人格」概念に異を唱えたレヴィナスの、宗教性と倫理性の「結び目」としての「人間なるもの」が、即ち、〈他人〉の苦しみにによって傷つけられ、〈他者〉に息吹を吹き込まれ賦活される「内部性」(intérieurité)によってはじめて「私」の「責任/応答可能性」(responsabilité)が自由とともに可能となるような主体性のありかたが、最終章の「飢え、痛み、祈る魂の身体性」の章にかけての論述を通して説得力をもって納得されてくるからである。生の諸相に痛み、老いる一個の身体でありながら、他者の苦しみに触発されて自らが問いただされ、他のもののために「祈り」として自己を捧げる方位に差し向けられる「魂」の身体性ともいうべきものについてより具体的に論じられていく最終章及び結語の部分は、レヴィナスの難解な議論の筋道を改めて印象的に掘り起こして完成度の高い論述となっている。村上君は、先の「内部性」に関しても一見類似した「内在性」(immanence)との相違や、「聖」(sacré)と「聖潔」(saint)など、レヴィナスにおける用語間の似て非なるそれぞれの意味を繊細に読み解き、原文テキストの的確な読解によって、その思想を倫理と宗教の結節点として読むことの意義を筋道だてて提示しており、レヴィナス研究のその方面での深化に貢献する論文を完成させたといえる。

但し、問題がないわけではなく、前述のような humanisme に関しての先行的な区別自体がそこに含まれる概念の多義性を正確に把握することを妨げるのではないかとの指摘も、またそれに関連してのハイデガーの「ヒューマニズム書簡」やデリダの諸々の言説に対する追求の不足など、顧みるべき点は論文前半部に見いだされる。この一語が背負ってきた様々な歴史的思想史的経緯を追ってそれぞれの時代にインパクトを与えてきた思想的概要を示すことは本論の目的からすれば困難であったとしても、その点に関するより全的な展望に向けての姿勢は暫定的な形で示しておくべきであったと思われる。次の機会にはこうした点についてもより緻密な取り組みがなされることを期待したい。また翻訳上での訳語の選択など、指摘され得る事柄は諸点あるにしても、それらは論文全体の意義を左右するような瑕疵ではない。著者の明確な問題意識の下、独創的なアプローチで追求された本論文がレヴィナス研究の新たな視座と解釈の試みを提示して高い学術的意義を有することは疑いようがない。審査員一同は村上君の学位請求論文が、博士学位(哲学)を授与するにふさわしいものと判断する。

2016年4月20日

審査委員一同